令和４年度第１回秩父市総合教育会議議事録

期　日	令和 4 年 6 月 30 日（ 木曜日 ）
時間・場所	15 時～16 時 25 分・歴史文化伝承館５階第１会議室
出席者	北堀市長、前野教育長、松本教育委員、山中教育委員、大島教育委員、浅海教育委員 市長室長、市長室専門員兼総合政策課長、市長室参与、総合政策課主査、教育委員会事務局長、教育委員会事務局次長２人、教育委員会専門員兼教育総務課長、学校教育課長、教育研究所長 傍聴者なし
会議内容	○市長挨拶 ・市内の新型コロナウイルスの感染状況は、今年の４月には毎日２桁の陽性者が発生していたが、今月に入り、１桁まで減少してきた。 ・ワクチン接種も進み、すでに３回目接種を終えた方が、６割を超え、７月中旬から３回目を接種後、５か月以上経過した方及び基礎疾患のある方を対象に４回目の接種も開始される。特に高齢の方はリスクは高いので、４回目の接種を受けていただきたい。 ・先月、厚生労働省からマスク着用についての指針が示されたが、子ども達の学校生活においては、屋外の運動に限らず、プールや屋内の体育館等を含め、体育の授業や運動部活動、登下校の際のマスクの着用が不要となったため、適宜マスクを外してほしい。 ・また、これから本格的に熱中症に注意しなければならない時期になりなるので、水分補給をして注意いただきたい。 ・今後、コロナの収束が見え、第２類から５類になることによって、日常の生活も取り戻せるようになるだろう。 ・今回も皆様の様々な経験の中から、お知恵を拝借していきたい。 ○教育長挨拶 ・松本委員さんが職務代理者、浅海委員さんを迎えて新体制になった。 ・本日、修学旅行最後となる秩父第一中学校が京都奈良方面へ出発となったが、無事に帰ってほしい。 ・働き方改革については、本県でも過労死ラインの月の８０時間を超えないように、６月は調査月になっており、業務改革が強く求められている。 ・教員採用試験の受験者数が低下傾向あり、ついに１．９倍で２倍を切ってしまった。 ・ヤングケアラーについては、昨年度、小学校５年生から中学校３年生までの間で無記名調査を行った。ヤングケアラーという言葉の意味が

	十分理解されていない。 ・県内の高校２年生の調査の結果、４．１％、秩父市では、１２．２％の数値がでているが、内容が理解されていない部分もある。 ・今後十分な実態調査と福祉部門との連携も必要となってくる。 〇浅海委員ご挨拶 ・５月から新たに教育委員となった。高校教員であったため、色々な立場で話していき、秩父市の教育のために尽くしていきたい。 〇議事 **（1）学校現場の働き方改革の取り組みについて** <u>資料１について教育委員会事務局飛川所長より説明</u> （松本委員） ・私が若い時には、働き方改革ということは聴いたことがなかった。この言葉が叫ばれてきたのは、教師が体調を崩したり、子ども達が学校に行かなくなったことが原因ではないか。 ・実態把握後が大切であり、どのように対応するかということを考えていかないともったいない。 ・中学校は、部活指導のために時間が減っているのではないか。？ ・また、一概に数値だけで判断できない部分があるのではないだろうか。例えば、時間外をどうしてもやりたい、やらなければならないという教師もいるため、そのことを理解していかないと、子どもにも影響がある。教育委員会としても現状をよく知っておく必要があるのではないか。 ・国の動きに合わせて、秩父市でも色々な意味で進めてもらいたいが、実際にやるのは学校なので、強制にならないよう、各学校の自主性を出して進めていってほしい。 （山中委員） ・非常に多岐にわたる課題があることを改めて感じている。資料には課題と今後どのようにしていくが良くまとまっている。 ・コロナ禍を経て、様々な企業の中で働き方改革が叫ばれており、学校でも考えていかなくてはいけない。一般の企業と異なるのは、学校は人を育てる現場で人の心を育てる場。先生方の専門性と働きやすい環境を整えることは、子ども達にとって非常に大事なことである。 ・先生の勤務時間を見直すことは、今まで子ども達にかけていた時間が減ってしまうのではないかという懸念があるが、学校と保護者が情報共有をしていくことが大事だと思う。

	・各学校には、学校運営協議会がある。その場を活用して、保護者の疑問や地域の方々と教育体制について話し合う場所が非常に大切だと思う。そのことが地域づくりにも繋がっていく。 （大島委員） ・２０１６年の第２次安倍内閣から働き方改革が提唱されてきた。 ・秩父市の対応は、素晴らしいスキームだと感じる。一つ一つがきちんと運用されていければ、良い労働環境が構築されると思う。 ・しかし、各学校で温度差があるのではないかと感じている。花小ＰＴＡ時代の経験を振り返ると、午前４時のスキー教室の見送りや運動会の事前準備時間など、先生の熱意があると、どうしても学校での拘束時間が増えてしまう。ただ、そのことが、先生の生きがいにつながるのであれば、それを規制することも難しいと感じる。 ・一方で、超過労働、モンスターペアレント対応等がある。 ・聖職である教師という仕事に対して、子ども達が憧れる現場を作る必要があり、そのための働き方改革であれば、進めていく必要があると思う （浅海委員） ・私は、今年度から大学で教員養成をしている視点から、大学生が教員をどのように見ているかについて紹介したい。 ・現在、大学１年生を教えている。５６人のクラスの中で、教員になりたい度数を「１」～「１０」にしてアンケートを取ったところ、「１０」と回答した生徒が、４６．４％。「９」と回答した１６．１％で、６２．５％が「９」、「１０」という結果。「５」という生徒が５人ほどいた。 ・自由記述欄には、教員はブラックという言葉が１０人程度いた。 ・最終的に教員試験を受けるのは、６割弱という結果になる。学生たちの不安要素の第１位は、保護者対応や部活動顧問。また、インクルーシブ教育に対する不安がある。 ・学校現場には、学生達にとって底知れない不安があるのではないかと思う。４年間の大学生活の中でどのように消化していくのかが課題。 ・学校が本来行うべき業務は何なのか。ＰＴＡや保護者に任せてしまっても良いものもあるのではないかと思う。大胆に教員がすべき業務の見直しをしても良いだろう。 ・ただ、子どもが好きだからという理由だけで学生達が教員を目指していく状況は厳しい。 ・国や県が色々な施策を取り組んでいくと思うが、秩父市独自の施策を先駆けて打ち出していただければと思う。 （松本委員）

	・ブラックという言葉は、マスコミが作っているのではないか。例えば芸人さんが昔のエピソードを話していることも要因ではないか。そのイメージを払しょくするのは難しい。 ・学校は、教師ひとりでやっているわけではない。学校を一つの形にして進んでいかないとブラックのイメージが払しょくされないと思う。 ・先生方は、モノを作っているわけではなく、人を育てている。その意識を非常に大切にしてほしい。人づくりだと思って、新しい先生方には、わからないことは同じ学校の先生方に聴いて、協力してもらって、意見を聴いてもらえる体制づくりをしてほしい。 （前野教育長） ・教員という仕事は、人を育てる素晴らしい、非常にやりがいのある仕事である。しかし、なかなか子どもと向き合う時間がなく、勤務時間外にやらなければならないことがあるので、働き方改革が叫ばれている。 ・埼玉県は、日本一働きやすい学校の先生を目指している。 ・秩父市でも様々な取り組みをやっている。ＩＣＴ支援員の導入や公務支援ソフトの導入、多くの補助員にも入ってもらっている。教員業務支援員、学習支援員、特別支援補助員、司書教諭補助員などの職種の方々がたくさんいる。これらの方々が、先生方が本来やるべき仕事を分担して行っているので、学校が成り立っている。補助員には予算が多くかかるが、学校には欠かせない存在となっている。 ・今年度、初任者の先生で体調を崩している方もいる。先生方の負担を少しでも減らしていく改革を進めていかなければ、子ども達に元気で明るく接することができない。 （市長） ・教員としての取組姿勢が昔と変わってきている。サラリーマン化してしまった。公務員になれば、安定した生活が続けられるという思考があるのではないか。それは、医療の現場でも言える。志が変わってきたのではないかと感じる。 ・私達が子どもの頃と比べて、ＰＴＡの発言力が強くなってきた。保護者の方々が何かあればマスコミに訴え、すぐにマスコミが食いつく。人の職業に対する向き合い方が変わってきた。先ほど松本委員からも発言があったが、教職員は、人づくり。家庭教育は家庭でやってもらう。 ・私は普段から幼児教育が大事だと思っている。生活習慣が大事である。様々な家庭状況があるが、日本人として礼節を重んじて、挨拶をしたり、共助を大切にしてほしい。社会としての個人主義化が進んでしま

	った。 ・県の教育委員会の中でも問題となったが、不登校教員がいる。勉強はできる教師ではあるが、コミュニケーションが不安な状況。先ほども話があったが、マスコミの問題も大きい。 ・様々な問題が複合的に絡まりあって、メンタル的に弱い方々が増えてきていると感じている。 ・働き方改革は、一言で言うと簡単であるが、教育の現場だけではなく、社会の様々な中でその問題を抱えている。国の制度設計があまり良くない。様々な要因が重なり合って、今の現状が起きている。 ・最後は、一人ひとりの資質が大事である。そのためにも幼児教育の仕組みづくりが必要だと感じている。 **(2) ヤングケアラーについて** <u>資料１について教育委員会事務局飛川所長より説明</u> （浅海委員） ・ヤングケアラーという言葉が、まだ認知が低い言葉である。 ・アンケート回答にあった、４６名の子ども達が、それぞれ負担に感じているかどうかによっても異なるのではないだろうか。もしかしたら、小さい頃から母親等の面倒を看ているため、そのことが普通の状態である可能性もある。 ・自らがヤングケアラーと言われることに抵抗感があり、ジェンダーの問題にも繋がる恐れがあるため、慎重に考えていかなければならない。 （大島委員） ・ヤングケアラーの定義の中には、お手伝いの範疇になることもある。しかし、それがエスカレートして、学校に行けない、子ども同士で遊べない、自分の時間が使えないのであれば、それは問題である。 ・周りの人が、他人の家に対して、関心を持ってあげることが非常に大事だと思う。ヤングケアラーについては、多角的角度から解決する必要ある問題だと思う。まずは、実態をつかみ、学校でどのようなサポートをしていけるか考えていく必要がある。学校では、子ども達に対してヤングケアラーという言葉をしっかりと伝えていくことも大事である。 ・兵庫県の明石市では、シングルマザーの家庭に対して、手厚い支援を行い、人口が増えたという話も聞いている。生活弱者に寄り添うような支援を市が行うことで、持続可能な自治体へと繋がるのではないかと感じている。 （山中委員）

	・ヤングケアラーには、多岐にわたる理由がある。新しい言葉でもあるため、学校、保護者、地域の方々への周知からまずは始めていくことが大事だと思う。 ・家庭の中で、世話をしていることは、その子どもにとって生活の一部となっている場合がある。小さい頃からやっていること。その子ども達が、自らをヤングケアラーと知った時に対するケアも考えていく必要があるのではないか。 ・なかなか実態が掴めない問題でもあるため、まずは、些細なことでも子ども達が気軽に相談しやすい環境づくりが大事である。 （松本委員） ・資料に言葉の１０項目の定義があるが、家族であるのであれば、やらざるを得ないのではないかと思う。例えば、上の子が下の子の面倒をみることはごく自然のことである。 ・テレビなどで様々な報道を目にする。さいたま市では進んだ取組をしているが、その実態は、相談が多いようである。その次の対策が必要ではないか。 ・昔は、このようなことは当たり前だった。しかし、自らの遊びや学校に行くことを犠牲にしてまでやった記憶はない。問題となっているのはその点である。このような世話をすることによって、自らのやるべきことができなくなる状態、自分の人生が変わってきてしまう状況。その状況を解消するために相談センターがある。相談してもすぐに解決するわけではないと思うが。 ・本市にもその可能性がある子ども達がいるのであれば、その把握と追跡をしていってもらいたい。 ・また、自らがヤングケアラーと言われることを嫌だと思われる子もいるかもしれないが、そのあたりは丁寧に進めてほしい。 （前野教育長） ・本来家族の構成は、子ども自身は自ら選ぶことはできない。大勢の家族であれば、誰かの手伝いや面倒をみなくてはいけない状況はあるかもしれない。家庭が助け合いをしながら、一緒に手伝っていくことを幸福と捉えているかもしれない。思いやりの心が育まれることもあるかもしれないが、子どもは守られなくてはいけない。 ・学校としては、子どもの状況を福祉部局との連携を図りながら、子どもへの支援を考えていく。もし、相談がなくても、内容に応じて、何かしらの対応をしていく必要がある。しかし、デリケートな問題であるため、自らがヤングケアラーということで学校へ行けなくなるかもしれない。

	・子どもを守る観点から、学校としてもやっていくことが今の時代で重要なことだと感じている。 （市長） ・ヤングケアラーという言葉が、一人歩きしないように気を付けなければならない。家族のためにお互いが助け合うことは、ある意味で良い家庭教育だと思うが、すべてがヤングケアラーに該当するのかどうか。もし、本人が負担と捉えているのであれば、学校や行政で支援を行わくてはいけない。 ・子ども達が困っていることがあれば、しっかり実態を把握して、ヤングケアラーという言葉を使わずに、その困っていることを解決してあげれば良い。 ・子ども達にとっては、家庭の中の問題は打ち明けられないという状況もあるため、学校の先生がその子ども達の様子をみて、相談に乗ってあげる環境づくりが大事。どこかで助けを求める子ども達の環境づくりを進めていかなければならないと思っているが、子ども達もデリケートであるため、どこまで心を打ち明けてくれるかどうか。 ・本人がどのように受け止めているかが大事であるため、ヤングケアラーという言葉が一人歩きしないように注意しなければならない。この状態は、昔からあった話ではないかと思う。戦前や高度経済成長期もあったが、家族一緒になって乗り越えてきたと思う。 ・子ども達の苦労には二通りある。良い方向にいくパターンと自らがひがんでしまい、悪い方向にいくパターンがある。 ・教師が、子ども達の顔色をみて、しっかりとキャッチしてあげられるかが大事である。 （松本委員） ・ヤングケアラーが原因で学校に来れない子ども達の対応をしっかりしていただければ良い。 〇閉会 以上